

---

# 森歌の民～小鳥の話～

蒼月 かなた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

森歌の民〜小鳥の話〜

### 【Nコード】

N7148U

### 【作者名】

蒼月 かなた

### 【あらすじ】

森歌しんかの民の子、炎樹えんじゆ幼い彼女の日常と成長していく過程のお話。  
「歌えぬ小鳥のオラトリオ」と世界観を同一にしています

## 炎樹5才

炎樹えんじゆは窓から外を見てホウと溜息を吐いた。今日もまだ母様は帰ってこない。

「どうした炎樹」

「父様……母様は私の誕生日までに帰って来てくれるかなあ……」

母様はいつも炎樹の誕生日の3日前には帰って来ているのに今回は2日前になっても帰ってこない。

「少し前に、南の戦が終わったからな。葬送歌を歌わねばと手紙で言っていた。規模が大きかったから手間取っているんだろう」

炎樹の大好きな母様は歌士の人、森の人と呼ばれる森歌しんかの民の歌い手だ。その容姿から『朱炎の歌姫』という字あざなで呼ばれている。父様もまた同じく『深緑の長』『森の王』と呼ばれる歌い手でこの森歌の民の族長でもある。若い頃は共に旅をした事もあったようだが、炎樹が産まれてからは交代で村を出て旅をしている。両親共に揃っているのは年に数カ月だけだ。

森歌の民の歌は人の子の歌とは違い、雨を呼び、森を育て産まれた子を祝福し、死にゆく人の道標となる。とても重要な歌を歌わねばならない。

その仕事はとても尊敬されるもので、世界の各地で村人や王が森歌の民が訪れるのを待っているのだ。その割に村の暮らしはとも慎重らしい、自給自足の生活だ。森歌の民は誇り高く、その日の糧しか受け取らない。宝石も絹も森歌の民の誇りの前には全てが無意味。

そう言われるほど彼らの生活は徹底していた。それがゆえに無駄な争いが起きない。それがゆえに外の誰もが森歌の民に敬意を示す。でも炎樹はまだ5才の子供だったので、両親が家に来てくれる方が嬉しいのだった。

「今日、学校で言われたの。誕生日にも帰って来てくれないなら母様は炎樹の事大事じゃないって」

何時の世でも子供は口さがない事を言うもの。しかし、炎樹は思いっきり傷ついていた。

「馬鹿な事を。他の子に何と言われようと、炎樹。これだけは覚えておくんだ。母様も父様も炎樹が大事だし大好きなんだぞ？そんな悲しい事を言うもんじゃない。母様が聞いたら泣いてしまうかもしれない」

炎樹の朱金の髪を撫でながら父が様が優しく炎樹を抱きしめる。

「本当に本当？」

「本当に、本当だ」

「えへへえ」

どうやら小さなお姫様の機嫌は治ったようで、満面の笑みで父様に抱きついた。

「そら、炎樹、見て御覧」

「？」

窓の外には急ぎ足でこちらに向かう人影。炎樹と父様に気付いて手を振って微笑む。

「母様だあ！！！」

慌ててパタパタと外に出る。そのまま走って行って炎樹は思いつきり抱きついた。

「お帰りなさい！！お帰りなさい母様！！！」

「ただいま炎樹！遅くなってごめんね？いい子にしてた？？」

「うん！！！！炎樹、ちゃんといい子にしてたよ？」

「ふふ。大きくなったわね！私の可愛い小鳥さん」

そう言うと母様が炎樹の頬にキスをする。

「お帰り！」

「ただいま、あなた！」

父様と母様が互いの頬にキスをする。森歌の民の親愛の情の表し方だ。

「ずるい！！父様！！！！炎樹まだ母様にしてない！！！」

「ああスマン」

そうやって苦笑した父様が炎樹を腕に抱きあげる。こつすれば母様の顔に炎樹の顔が届くからだ。

「えへ。母様大好き！」

そうやって母様の頬にキスをする。

「私も大好きよ！炎樹」

今日は母様と父様と三人で川の字になって寝るだろう。母様は外の世界であった色々な事を話してくれるに違いない。炎樹は幸せそうに二人に挟まれながら家に入って行った。

## 炎樹5才（後書き）

歌えぬ小鳥のオラトリオを書き終わった時に、母様〜！〜と飛び出してきた子がいました。炎樹です。なんとなく、終わらせたくなくなつてこの形で書かせて頂く事にしました。あまり長いお話にはならないと思いますがお付き合い頂ければ幸いです。

## 炎樹8才〜出会い〜

初恋は6才の時、炎樹には全く自覚はなかった。浅黒い肌、黒い髪、アメジストの瞳。その男の子に会ったのは森の中。一目で、外の血を引いていると知れた。森歌の民には浅黒い肌の人がいなかった。少年は歌を歌っていた。それは、森歌の民の歌と同じ力があり、恋を歌った歌だった。炎樹は少年が歌い終わるまでじっと待つ。炎樹の黄金色の瞳が好奇心に煌めいていた。少年が歌い終わると、炎樹はパチパチと手を叩いた。少年が目を見開いて驚く。

「いつからいたんだ……………」

「んー、途中から？私、炎樹。あなたの名前は？ねえ今の歌は何て言うの？何処の歌？」

好奇心から詰め寄って聞けば、逃げ腰になった少年が口を開く

「……………一気に沢山聞くなあ……………俺の名前は紫音<sup>しおん</sup>。今の歌は『愛を乞う』、俺の親父の故郷の恋歌だ」

「素敵な曲ね！私今の曲好きー！」

「変な奴だなあ……………、皆俺の事気味悪がって見てたのに」

「なんで？」

「この色の肌が珍しいんだろ？こっちじゃ全然見ない色だしな」

「不思議で綺麗な色なのにな？赤銅色っていうの？」

そう言えば、照れたように紫音が叫んだ。

「やっぱり、お前変！！！」

「変じゃないもん綺麗なものを綺麗って言って何で悪いの！！！！」

「はあー別にいいケド……………」

「紫音はの父様は外国とっくにのひとで母様が森歌の民だから『歌』が歌えるのね」

「ああ……………母さんにこつちの歌も教えて貰ったんだけどな、俺には親父の国の歌の方が性に合う」

「私の父様と母様が良く言うよ？歌は無理に歌うもんじゃなくて、魂に添って歌うものだって。紫音の魂はきつと今の歌に近いのね。紫音はココで暮らすの？」

「いや。親父んとコ。今日は爺ちゃん婆ちゃんに挨拶に来ただけだから」

「そうなの？折角『歌』えるのに……………」

残念そうな顔をすれば、ポンポンと頭を撫でられる。

「祭りの時とかは来るぞ？でも、歌えるのは内緒な？まだ誰も知らないんだ」

「え？父様や母様も？！」

「歌える子がいる場合は強制的に森歌の民の学校来なきゃなんない  
だろ？俺、親父みたいに傭兵になりたいから」

「そっかぁ………わかった。二人だけの秘密ね？」

それが出会い。しかし、次に再会した時には少年は全く別人のよう  
になっていたのだけれど。

炎樹は母様から目を逸らし、むくれた状態で隣の少年を見た。紫音  
だ。所々傷が出来て着衣はビリビリになっている。その隣には、も  
っとボロボロになった少年が歯を食いしばってこちらもむくれてそ  
っぽを向いていた。周りにはその子の両親、紫音の祖父母、そして  
学校の先生、そして炎樹の母様がいた。

「さぁ、喧嘩の原因はなんですか？」

誰も何も言わない。しかし空気は完全に紫音が悪い事になっていた。  
ボロボロの少年をほぼ一方的に殴っていたのだ。しょうがあるまい。  
炎樹は喧嘩の原因は知らない。いきなり、喧嘩が始まって、炎樹は  
それを止めに入ったのだ。一緒に怒られる理由は………心当たりが  
無いでもない。さっきの喧嘩の時売り言葉に買い言葉で紫音を傷つ  
けたからだ。

「僕知ってるー」

「僕も」

「私もー」

そう言ったのは窓の外からピョコピョコ飛んで中を見る低学年の子供たちで、一番ボロボロの少年が「馬鹿！言うなよ」と慌てている。それを見て母様がボロボロの少年に言った。

「小さな子たちに言われるのと、自分から言うのどちらがいい？」

「っ……………僕から……………イイマス。コイツがいつつもツンと澄まして生意気だから……………その……………」

「外の奴はどうせ歌えないんだから出て行って言ってたー」

「たー」

「っオマエラ！…！」

言いにくい事を、小さな子たちに言われてボロボロの少年の顔が羞恥に染まる。

「「夏歌<sup>かか</sup>！…！」」

男女二人の怒声が響く。夏歌と呼ばれた子の両親だ。

「あんたって子は…！…なんてこと言っただい…！」

「いてっ痛えよ母ちゃん…！」

夏歌の両親は、さつきまで誤解していた事を恥じるように、夏歌に無理矢理頭を下げさせて紫音に謝る。

「ごめんねえ……………紫音君。うちの子が悪かったね」

「別に」

対する紫音はそっけない。ただそっぽを向いて言うだけだ。そんな中母様が溜息を吐いて夏歌を見る。

「……………紫音は森歌の民です。自分が何を言ったのか理解できませんね？何が悪いのかも」

「う……………ハイ」

「なら、二度としない事です。あなたが同じ立場になった時の事を考えなさい」

「はい……………ごめんなさい」

夏歌は、両親に叱られた時よりも落ち込んでいるように見えた。紫音に一度謝ると両親が更に紫音に謝りながら夏歌を連れて部屋を出て行く。

紫音はそれを完全に無視した。その様子に残った大人たちが溜息を吐く。

紫音は、今年の「豊夏とよかの月」に商隊に連れられて一人でここに来た。戦で父を亡くし、流行り病で母を亡くしたので唯一の肉親である祖父母を頼って来たのだった。そこには以前、炎樹に会ったキラキラした活発な少年は何処にもいなくなっており、陰鬱で無口な少年だ

けがそこにいた。先週から学校に通うようになったものの、周囲と溶け込もうとせず、炎樹の事もまるで知らない人を見るように接し、全く歌おうとしない。また色々な少年と小競り合いが絶えなかった。教室の中ではスカした嫌な奴という見方が定評となりつつある。

「さて、炎樹、何故あなたがここに残されたか分かりますね？」

「はい……………母様」

この口調の時の母様は炎樹の母様と言うより族長の妻と言う立場である事が多い。気まずい思いで母様を見れば哀しそうな視線とぶつかって、炎樹は益々居心地が悪くなる。

先程の喧嘩を止めに入った時、紫音に「お前なんか偉そうにしてるけど歌が下手だろ！！」と言われてカチンときて「あんだなんて全然歌えないじゃない！！」と言い返してしまったのだ。それは森歌の民の歌をという意味だったのだけど……………その瞬間の紫音の傷ついた顔……………目に焼きついて離れない。以前は歌っていた紫音だから、そんな事で傷つくなんて思わなかったのだ。

「歌えないというのが森歌の民にとってどれだけつらい事か分かりますか？」

「だって、紫音は……………歌えるでしょ？」

秘密の約束、と言ったのを瞬間忘れて慌てて口を閉じるがもう遅い。

「紫音が歌えると知ってたのですね？だから傷つかないと思ったのね？でも紫音は今歌えないわ。そうね？紫音」

母様の言葉に驚いたように紫苑が固まる。それは、その場にいた大

人達も一緒だった。

「炎妃様、それは……………」

紫音の祖父が母様の村での尊称を呼ぶ。

「先程、紫音の眼を見ました。外国の血を引く子供は歌えない事が多いので私も驚いたのですが……………この子の魂に大きな傷が見えます。それが治れば歌えるでしょう」

「俺……………また歌えるの？」

茫然と呟いたのは紫音で……………。

「ええ歌えますよ。ちゃんと傷を治せばですが」

母様が優しくそう言えば、紫音が今まで堪えていた言葉を吐き出す。

「俺、俺、ずっと親父と母さんの為に歌いたかった！！！！けど前みたく歌えなくて……………両親の為に歌えない息子なんて何て薄情な奴だっ……………！！！！」

そう言っ蹲ってしまった紫音をお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが優しく抱きしめる。

「鈴音に似て馬鹿な子だねえ……………なんで祖父ちゃんや祖母ちゃんに言わなかったの？」

「前は歌えたのに今は歌えないなんて信じて貰えないと思ってた……………！！！！」

「良くある事なんだ。前世からの傷や、今世でとても傷ついたりした時に魂に傷が走る。それがあるとわし等は上手く歌えなくなるんだよ。一人で苦しかったなあ……………」

そう言ってお祖父ちゃんとお祖母ちゃんが紫音の背中を撫でてやると低く嗚咽が聞こえた。

「母様、母様。私どうしよう……………酷い事言っちゃった!!!」

ポロポロ泣きながら母様を見れば、そこにあるのは優しい笑顔で。

「炎樹にそんなつもりが無くても人を傷つけてしまう事はあるの。だから言葉は選ばないといけないわ。出ってしまった言葉は口の中には戻らないからね？さ、謝りに行きましょう?」

うんうん頷いて母様と一緒に紫音の所に行く。

「し、しお、ん、ご、ごめん、な、さい〜〜〜!!!」

わーわー大泣きして言えば泣き顔を見られた所為かバツの悪そうな紫音と目があって……………。

「ごめん、俺も悪かった。ごめんね炎樹」

そう言ってお頭を撫でてくれる手は優しく初めて呼ばれた名はほろ苦かった。

「炎樹、紫音の魂の傷を治すお手伝いをしてくれないかしら?」

「すんつ。お手伝い？」

「魂の傷は森歌の民の『歌』で治すの。あなたにもできるわよね？」

その言葉にコクコク頷くと母様が笑って言った。

「皆が忙しい時は炎樹が歌ってあげなさい。紫音の気持ちになって、紫音の心に添うのよ？そうすればきっと速く紫音も歌えるようになるわ」

それから炎樹は皆が忙しい時も忙しくない時も紫音の為に癒しの歌を歌った。自分が紫音を傷つけた罪滅ぼしだと思ったからだ。紫音は黙って聞きながら時々ホロリと涙を零す。そう言う時が一番心に添えたときだと知るのもっと先、紫音が歌を取り戻して炎樹のために歌ってくれた時だった。

炎樹8才ㄿ出会いㄿ(後書き)

ほろ苦い炎樹の初恋(当人自覚なし)でした。これから仲良くなれるといいね。

## 炎樹12才〜奉歌祭〜

今日は、「豊夏とよかの月」の収穫祭だ。村の行事には両親が共にいるので炎樹は元気いっぱいである。しなやかに伸びた手足で持つて森の中を駆け巡り紫音とひとしきり遊ぶと、祭りを見に二人、手をつないで麓におりる。

「今日の奉歌ほうかの歌い手は、流音るおん兄と世連せれん姉よ。あの二人結婚するんだって！！！」

森歌の民は年上の男女を兄、姉と呼んで慕う場合が多い。今回の奉歌を歌う二人も子供達にそうやって慕われていた。

「へえ？なんか奉歌でペアを組んだ二人が結婚してる気がするんだけど……………」

「ジンクスがあるのよ？奉歌を歌った二人が結婚すると幸せになれるって、まあ、でも母様みたいに奉歌のペアの相手じゃなくて別の人と結婚する事もあるけど……………」

そう言つてクスクス笑う炎樹にふうんと紫音が頷く。

「おまえんちの両親、すごい仲いいもんな」

「うん。そだ、紫音にだけ教えてあげる。来年は弟か妹が産まれるんだ」

「へえ、お前が姉さんか……………なんか変な感じだな」

「うん。実は私も変な感じっ。紫音なら特別に一番最初のお兄ちゃんて呼ばしてあげる」

「ふ。なら俺も楽しみだ」

えへへと笑う炎樹に紫音も楽しそうに笑う。

「このお祭りが終わって「秋癒しゅつゆの月」が来たら奏歌祭だな」

紫音のその言葉に炎樹の顔が曇る。

「うん。憂鬱うげつ。母様なんて私と同じ年に歌士の人、森の人って認められたんだよ？父様も族長やつてる位だから上手いじゃん歌。何か見えない皆の期待って言うの？ヒシヒシと感じるんですけど」

それを思うと胸が痛い。失敗して上の学年に上がれなかったらどうしようと思う。

「周りの事なんて気にするなよ。炎樹は炎樹だろ？お前はお前の俺は俺の歌を歌うだけ」

「紫音は歌上手いじゃんかあ。一発で合格に決まってるよ」

「お前緊張しいだもんな。俺やお前の両親の前では普通に上手いの……」

「駄目なんだよねえ……たくさん人がいる所で歌うの」

「先生達は目の前にいる人は畑の野菜と同じだって思えばいいって言うってけどな」

「思えないよそんなもん」

そう言いながら二人、すり鉢状に凹んだ奉歌の為の歌壇の上、差し掛かった木の枝の上に腰かける。

見ればちらほらと同じようにして座る子供たちがあった。こころは、声が良く響く、ほとんど子供しか来ないが特等席なのである。

「俺は炎樹と上に行きたいけど。折角実力はあるのに落ちたらスングエー間抜け」

「プレツシャーかけるなあ!!!!」

「じゃあ、これ貸してやる。母さんの形見のお守りだ。……………本番になったら俺の事思い出せよ。俺の前で歌う時の感覚を思い出せ」

そうやって紫音は身につけていた銀の透かしの意匠の入ったブレスレットをはずす。

「一番紫音が大切にしてるやつじゃん!!!!いいの????」

「いいから、貸すんだろ。お前は、俺の一番の友達だからな。落ちたりしたら寝覚めが悪いや」

そうやって不器用な感じに炎樹の手にブレスレットをはめた紫音は耳まで赤かった。

「有難う。紫音」

そうやって炎樹は紫音の頬にキスをする。

「ばっ、おまつ何やってんだ！コレはフツー家族にするもんだろ？」

「？だって家族みたいなものじゃない？」

「お前！ー！ー！いか、やたらめつたらホイホイとそんなことするなよ？」

「やだなあ、する訳ないじゃん。紫音だからしたのに」

「~~~~つ……………ならいい……………ケド」

自覚なしの炎樹に一抹の不安を覚えながら紫音が呟く。炎樹は時々突拍子もない事をする事がある。誰彼かまわずそんな事された日には勘違いする奴もいるかもしれないかと紫音は思った。

「本当に　　するなよ」

「うん？しないけど……………あ、見て歌が始まる」

歌壇に男女が二人上がって来た。羽根飾りやガラス飾りを髪につけ刺繍の入った民族衣装を着た二人。今日の祭りの主役、奉歌を歌う流音と世連だ。

「世連姉綺麗」

「二人とも幸せそうだな」

「うん！」

歌が始まった。豊猟を言祝ことほぎ豊作を言祝ことほぎ、天に大地に感謝をささげる。そして次の年の豊猟と豊作を祈るのだ。

歌は　遠く　深く　響く  
二人の声が共鳴し　辺りに鳴り渡る　不思議なほどの高揚感と静寂

場が浄化されていくのが分かる

これが森歌の民の歌。森歌の民の誇り。

歌は5分程で終わった。大きな拍手が雨のようにと鳴り響く。花が歌壇に降り注いだ。歌壇にいる二人が手を取り合って微笑む。

「いーなー。幸せそう」

「そうだな。炎樹、腹減った。何か貰いにいこうぜ」

「紫音は余韻とかないの？」

そう言いながらも炎樹は紫音と手を繋ぎ、村人から差し入れられた食べ物が置いてある屋台に向かって走り出した。屋台に人はまだ少ない。皆まだ歌の余韻に浸っているのだろう。二人は一通り屋台を巡ると両手に沢山のご飯を持って森の中へと走って行った。こちらの方が落ち着いて食べられるからだ。

「はあ、いーなー。紫音は結婚するならどんな子がいい？」

「ぶっ！！んなの分かんないよ。理想と現実は違うだろ？」

食べかけてた鹿肉を嘔き出して紫音が嘔せる。

「夢がないな。私は、私の事大切にしてくれて、いつも好きって言うってくれる人がいい。父様みたいな」

「……………いつも好きって言わなきゃ駄目なのか？」

「？別にいつもじゃなくてもいいケド。いつまでも仲良しな夫婦がいーな」

「そうか……………まあそうだよな」

お前って意外と夢見がちだよな……………と言いつつ紫音が苦笑する。

「夢見がちじゃないし。父様と母様はそんな感じだもの」

「そうなのか？意外。親父さんってそんなイメージなかったけどな」

「族長の顔の父様と家にいる時の父様は別人よ？母様もだけど」

「はあ、意外な新事実。じゃあ、炎樹の理想は自分の両親なわけだ」

「うん。そう」

「で、具体的に、想定する相手はいるのか？」

「？どゆこと？」

「好きな奴がいるのかって事」

「えっ！……いないよ」

一瞬、紫音を思い浮かべたのは言わないでおく。とてもじゃないが誰かと恋愛なんてまだ考えられなかった。

「いないのに言ってるのか？俺はてっきり……誰か好きな奴でもできたのかと……」

「いないってば……！」

「そっか」

少し残念そうにどこか嬉しそうに複雑そうな顔で紫音が言う。

「そういう紫音は好きな子いないの……？」

「俺?!……俺はいるような……いないような……正直分かんない」

「何それ?!」

「まだ、恋じゃないと思う。でもそうなるかも知れない感情がある」

真剣に見つめられて言えば炎樹の方がドキドキして来て……。真顔の紫音はやたらと迫力がある。

「う……じゃあ、いつかはっきりしたら教えてね？」

「うん。一番に教えてやるよ」

そう言って二人は額をくっつけてクスクスと笑いあった。

## 炎樹12才〜奏歌祭〜

今日は遂にやって来た奏歌祭で、炎樹は朝から大層緊張していた。

「炎樹、少しは食べたらず？」

「無理母様。入らない」

青い顔をする炎樹に困ったように母様は父様を見上げた。

「何時も通りにしてればいいんだ。炎樹が歌いたいように歌っていいんだよ。父様も母様もちゃんと傍で見てるから」

当たり前だ。二人は一番の特等席、炎樹の目の前の連座で見るのだから。しかもおっかないお偉いさん付きで。

「逆に余計に緊張するよう」

緊張しすぎてもはや涙声である。

「大丈夫よ炎樹。紫音がお守り貸してくれたんでしょ？」

そう言っ母様は炎樹を抱きしめた。コクリと頷く炎樹に、ほらと左腕の銀のブレスレットを触らせる。少しだけ落ち着いた気がした。

「皆炎樹の傍にいるよ。大丈夫だ」

そう言っ父様が炎樹の頭を撫でてくれる。

「うん」

そう頷いて炎樹は家を後にした。

学校は大騒ぎである。今日この日で小学年の生徒の一番上の7年生の進路が決まる。外国とくにに行ける歌士の人、森の人になれるのは生徒のうちの半分位で残りは普通の村人として村で過ごす。子供達も浮足立っていて、緊張してる子、テンションが高くなってる子、冷静な子と様々だ。どの子もこの日の為におめかししていて教室はいつもより華やかだ。教室内で一際目立つのは何時も紫音だ。異国の貫頭衣は彼の父親の一族のものか。黒と金の刺繍が、紫音の赤銅色の肌によく似合う。

「おはよう炎樹」

「……………おはよう紫音」

緊張した面持ちでそう答えれば、紫音に鼻をつままれた。

「シケた顔するなよ。俺のお守り貸してやったんだぞ？」

「分かってるよう！でも緊張しちゃうんだもん。紫音は何で平気なの？」

「別に俺だって緊張してない訳じゃないさ。でも俺より緊張してるお前がいるからなあ」

全然マシになったと言われて炎樹がむくれる。

「私は紫音の緊張を解く道具じゃないよ」

「そんなの当たり前だろ？」

「よう、紫音、炎樹……………お前顔真つ青だな」

みてるこつちが気の毒、と言ったのは夏歌で。

「だろ？俺も哀れになってきたとこだ」

「しょうがないじゃん！緊張するんだもん」

「取りあえず、お前座ってる。マジで倒れそうな顔色になってる」

そう言ったのは紫音で椅子を引いて炎樹を座らす。

「う……………ん」

そう言うと、炎樹は席に座り机に突つ伏した。おろしたての服が皺になってもこの際構わない。髪に挿した花が曲つたがそれもどうでも良かった。

「重症だなあ」

夏歌の声が聞こえる。

「元々緊張しいだからな」

と言うのは紫音。それから話題が今回、上の学年に上がるのは誰かとか他愛ない話に移っていった。

炎樹の胃がキリキリ痛む。少しでも何か食べてくれば良かったか。

しかし、食べたらず食べたで今度は気持ち悪くなりそうだった。そもそも、昨日も良く寝れなかった。寝不足が、余計炎樹の体調を悪くする。

うう。時間まで少し寝よう……………。

それから少し経って……………炎樹は紫音に起こされた。どうやら少しは寝れたようだ。

「時間だ。もうみんな校庭に出てる」

見渡せばあんなにごった返していた教室に炎樹と紫音意外誰もいない。

「皆もう行ったの？」

「今さっきな。先生には俺が炎樹を連れてくつて言つといた」

では朝礼の時間も寝てたのだ。あまりの恥ずかしさに顔が赤くなる。

「ありがとう」

「そんな恰好で行く気か？ちょっと待て。いいから……………ヨダレ」

慌てて頬を拭こうとする手を止められた。

「紅が禿げるだろ。待ってる拭いてやるから」

そう言つてハンカチで口元を拭ってくれる。今日はお祭りだからと母様が花から採ったピンクの染料で唇を塗ってくれた事を思い出す。

それから紫音は炎樹の髪を整えると差していた花の位置を元通りにしてくれた。服の皺はあまり目立たないので助かった。でもなんだか小さな子供に戻ったみたいで恥ずかしい。

「うう。なんか子供に戻ったみたい」

「子供を構ってやる程暇じゃないし。どうせ昨日緊張して寝れなかったんだろ？少しは気分良くなったか？？」

「うん。お陰さまで。だいぶましになったよ」

「そいつは良かった。じゃあ行くぞ炎樹」

差し出された手を握って炎樹は歩き出した。

校庭はかなりの人でごった返している。中央に拵えられた連座の前でもう歌い始めてる子がいた。名前を呼ばれるまで各々好きな所で緊張をほぐす。炎樹と紫音は大きなコクリコの木の下で座りながらその時を待った。紫音が先に呼ばれ、少し緊張した面持ちで連座に向かう。

「紫音なら大丈夫だよ。行ってらっしゃい」

微笑んで送り出せば、おうと、力強い返事が返って来る。

紫音の歌が始まった。初めてあつた時間聞いた異国の歌。恋歌だ。あの時よりも更に声の伸びが加わり切なさや愛おしさがこみ上げてくるような歌いかただった。紫音には誰か好きな子がいるのかもしれない。そんな事を考えて炎樹は少しドキドキした。明らかに今まで歌っていた子達の中で一番上手い。

「凄いなあ紫音」

炎樹の瞳からポロリと涙がこぼれた。紫音の歌はこんなに人の心を震わす。甘く切なく心を温める。

やがて歌が終わると紫音が歓喜の笑みを浮かべるのが見えた。拍手と共に紫音が上の学年に行くのだというのがはつきりと分かる。駆け戻ってきた紫音は喜びではちきれんばかりだった。

「へへ。親父と母さんに良い報告ができるぞ！！これも炎樹のお陰だ」

「え?!私?」

「本当は、父さんの故郷の歌でやるの心配だったんだ。でも昔お前が俺の魂は親父の歌に近いんだって言ったろ?だからこの歌にしたんだ」

「そうだったの。初めて会った時だねそう言ったの……………」

「ああ。次はお前の番だぞ。絶対落ちたりするな」

「そんな事言われても……………」

「大丈夫だ。俺が保証する。炎樹の歌はとてもキラキラしてて綺麗だ」

そう言って紫音は炎樹の左手に嵌った銀色のブレスレットに口付する。

「これもお守りな?」

離れてても傍にいるからと言われ炎樹はただ頷くしかできなかった。やがて炎樹の名が呼ばれ……。連座の上に。周りには好奇心溢れる視線と、前には両親の暖かい視線、そして紫音の鋭いアメジストの眼差し。チャラリと左手のブレスレットに手を伸ばす。紫音が貸してくれた。お守り。傍にいますと言ってくれた。緊張した面持ちのまま大きく深呼吸する。

来て　　私の歌

大切な人達の為に歌おう。そう決めて　　炎樹は心の扉を開く。

始まりは音　　。緊張して少し喉に絡まる。でも気にしない。コレは呼び水。私の歌を呼ぶための……。

炎樹の中で歌が弾けた。

歌は言祝ぎの歌だ。産まれてくる子供に、結婚する人達に、この地の全てに言祝ぐ歌。

天に大地に響く歌。身体の中を歌が廻る。廻った歌が外に出る。風と共に響いてこの地を廻る。クルクルクル歌は廻りそして炎樹のもとに戻るのだ。

誰かがほう、と溜息を吐いた。それが響く静寂。炎樹の歌は終わっていた。いつ終わったのか炎樹にも分からなかったけど。

「良い歌ですな」

「ええ良い歌でした」

ニコニコ笑ってそう言ったのは父様と母様の横に座るいつもは怖い

お爺ちゃん達で。

「炎樹。良い歌だった。次は上の学年で学びなさい」

そう言ったのは大好きな父様。母様は涙ぐんでいて頷いてくれる。

炎樹はやっと安心できて思わずその場にしゃがみ込んだ。驚いた人達が大丈夫かと声をかける。

「……………腰が抜けました……………」

慌てて走ってくる紫音の姿が見えた。炎樹は泣き笑いの状態で、紫音が来るのを待った。

## 炎樹16才〜変化〜

炎樹は木の裏でシマツタと身を強張らせた。大木の反対側で、告白が始まってしまったのだ。しかも、声から察して自分が良く知る紫音と同じクラスの礼音れいねの……。ツキリと胸が痛んだが炎樹はそれに気付かない。

「紫音、私じゃ駄目？」

校内一、二を争う美人に告白されるなんて紫音も隅に置けない。今回こそは付き合うかもしれないが、告白現場に居合わせるなんて気まず過ぎる。炎樹は立ち去ろうかとも思ったが、隠れられる所はこの木の裏しかない。諦めて気配を殺して幹に同化しようと努める。最近女の子から「炎樹と紫音は付き合っていないの？」と良く聞かれる。確か、礼音も何人かの友達と聞きに来ていた。2日前だ。

「悪いけど……」

紫音の答えはそっけなかった。そこがいいのー、と炎樹の女友達は言うのだが。

もっとなんか言ってあげればいいのに……！！

と思ったのは、泣きながら礼音が走り去る音を聞いたからだ。

「盗み聞きか？」

「ひゃあう……！！」

まさか気付かれてるとは思ってなかった炎樹の口から訳の分からない声が出る。

「嘘。悪かったな聞かせて」

「ああ、うん。ビックリシタヨ。もしかして、もろばれ?？」

「俺だけにな。悪い、ちょっと膝貸して」

そう言うなり紫音は炎樹の膝に寝っころがった。

「しょうがないな……………でもなんで?」

「……………好きでもない子の告白断るのってなんか疲れないか?」

「残念ながら、私には経験がないので分かりかねます」

「……………ああ……………」

納得顔をされて炎樹がむくれる。

「うっさい!?!?!?!しょうが無いでしょ。紫音と違ってモテないんだから」

「いや、そーいう事でなく……………まあ、俺が傍にいたからなあ……………」

そうか、あいつらまだしてないのか、とブツブツいう紫音。

「何ブツブツ言ってるの?」

「なんでもない。そう言えば炎樹は……好きな奴できたのか？」

「うーん好きって良くわかんないんだよね？どの好きが恋愛の好きになるのかさ。やっぱりドキドキするのがそうなのかなあ？」

「じゃあ、試してみるか？」

「ほへ？」

そう言っただけで起き上がった紫音の顔が目の前に来て　　もう少しで唇が触れる、と言う所で……唐突に離れた。

「あーいたいた！！！紫音、炎樹、先生が探してたぞ？」

そう言っただけで来たのは同級生の亜歌あかで……炎樹はバクバクする心臓を抱えて氷ついていた。紫音の顔がまともに見れない。冗談といえどやっていい事と悪い事が……。

「炎樹、どうしたの？顔赤いけど」

不審げに亜歌に問われれば答えるすべもなく……。

「なななななな、なんでもないっ！！！！！」

そう言っただけで炎樹は走り去った。

あの後、炎樹はまともに紫音の顔を見れないでいる。紫音の方は何事もなかったように普通に普通で、それが余計に腹立たしい。なんでもんな事しようとしたのか真意も分からず、ただ炎樹は混乱したままだった。放課後になって、紫音が炎樹の所にやって来た。

「炎樹、まだ怒ってるのか？」

「おおお、怒ってないし」

「お前拳動不審過ぎ」

「誰の所為でこんな事になったと！！！」

そう言っつて顔をあげれば紫音と目があつて、慌てて目を逸らす。

「帰る」

一言そう告げて、がたんと椅子の音を立てて立ちあがり炎樹は初めて一人で帰る事にする。後ろから夏歌の「珍しいな。喧嘩したのか？」と言う声が聞こえたけれど炎樹は無視して歩き去った。

一人で帰る道は何時もと違って寂しい。紫音が余計な事をしなければ今日も楽しく帰れたのに。

そんな事を思っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「炎樹！！珍しいね、君一人？？？」

声をかけて来たのは同じクラスの音羽おんはという青年だ。

「うん……ちょっとね……」

「何？喧嘩でもしたの？」

「う……ん、そんなとこ」

「君達でも喧嘩する事ってあるんだね。……でも、丁度よかったかなあ……」

「？何が」

「オレ、君に話したい事があって……さ」

話したい事ってなんだろう？立ち止まった音羽に炎樹も足を止める。

「ねえ炎樹。君、紫音とは付き合っていないだってね。だったらさ、オレと付き合ってみない？」

爆弾が投下された。予想もしなかったところから攻撃がきて、炎樹の拳動が明らかに不審になる。

「この様子だと、オレが一番乗りみたいだね」

「い、一番乗り？」

ちょっと半泣きでそう言えば、音羽が満面の笑みを浮かべる。

「気付いてなかった？炎樹、学校で結構人気あるの」

「し、知らない！」

零れ落ちそうな涙を目じりで拭われ炎樹は余計に縮こまった。

「今までは紫音が行きも帰りも休み時間も一緒だったからね。牽制になつてたというか……？」

牽制してたのかな、と言つて音羽が炎樹の髪を掬つて口付ける。いきなりの事に炎樹の頭は大混乱だ。

付き合つて事は……、音羽と手繋いで帰ったり、キスするって事……？

「ごめん無理！」

「無理はちよつと酷いんじゃないの？その反応は可愛いけど……取りあえず、試してみないかなつて。暫くオレと二人だけで登下校して、帰りにちよつとデートする。それだけだよ？」

炎樹は混乱した頭で考えた。二人きりと言う事はそこに紫音はもちろぬいなくて。

嫌……！紫音と帰りたい……！

唐突に出て来た叫びに炎樹は目を丸くする。

私………あれえ？

今はもちろん、気まずいから顔を見れないけど、紫音とずっと一緒に帰れないのは嫌だった。

「炎樹？ねえ炎樹、大丈夫？」

音羽の声が聞こえて我にかえる。駄目かな？と改めて問われれば、答えは一つしかなくて。

「ごめん、そう言つの考えられないや……………」

そう言えば、音羽に苦笑された。

「やっぱり、ガードが堅いね。じゃあとりあえずオレの気持ちだけ知っておいて」

囁くようにそう言って音羽は炎樹の手をとると指先に軽く口付て行った。

帰らなきゃ、と思いはしたものの、結局すぐに帰る気にはならず炎樹の足はは紫音と初めて会った場所にと向かっていた。

「じゅ……………炎樹……………」

「……………」

いきなり紫音の顔が目の前に現れて炎樹は思わず後ろにのけ反った。ゴンという音がして後頭部を木の幹にぶつける。そのあまりの痛さに頭を抱え蹲る。

「……………何やってんだよお前……………」

あーこりゃコブだな。という眩きが上から聞こえた。

「な、なんで紫音がここに？」

「帰ってからお前の家行ったらまだ帰ってなかったから……………」

「……………」

炎樹は無言で紫音の手を握った。昔とは違う、ゴツゴツした大きな手。変わって行く私達。身長だって同じ位だったのがいつの間にか追い越されて今はもう炎樹の頭が紫音の肩まで位しかない。声だって紫音は低くなった。変わって行く紫音、変わらない私。ぽろりと大粒の涙がこぼれた。

「おい、どうしたんだよ」

紫音の声が優しく響く。

「なんか紫音だけ先に行っちゃって、私、置いてかれるみたい……………」

「……………」

「何言ってるんだ……………おい。何かあったのか？」

「さっき、初めて告白されたの」

「誰に……………」

「音羽」

ヤロウと紫音の低い声が響く。

「試しに付き合ってみないかって」

「それで、なんて答えたんだよ」

不機嫌そうな紫音の声が炎樹の耳に届く。

「そういうの考えられないって言った……………音羽に髪にキスされた時も、指先にキスされた時もドキドキしなかったの。ただビツクリしただけ。なんか、皆どどん大人になってるのに私だけ置いてかれて……………」

「おい。他にはされてないだろうな……………」

言葉の途中で紫音の異様に低い声が聞こえて炎樹は思わず顔をあげた。鋭いアメジストの目が炎樹を捉える。

「え？」

「他にキスされてないだろうな」

「……………されて、ない……………ケド？」

「紫音……………なんか今日変だよ。さっきもそうだし、今も……………怖い」

「それは俺がか？それとも俺がする事が??？」

そう言って紫音は炎樹の手を取り指先に口付た。

な、何？！

かぁーと顔に血がのぼるのが分かる。心臓がドキドキと早鐘を打つ。

音羽の時には平気だったのに………?!

「消毒」

「消毒………？」

それから炎樹の髪をひと房とって苦笑しながら口付ける。

「炎樹、お前顔真っ赤」

そう言われれば顔をあげてられなくなって俯こうとする。

「顔上げる」

耳元で囁かれて炎樹は腰が砕けそうになった。声が出なくてフルフルと首を振る。

「炎樹」

名を呼ばれれば心臓がもう爆発しそうだ。

どうしたの私？

涙目で顔をあげれば目の前には紫音の顔があつて。

あ、まつ毛長い…………。

と思った時には口付られていた。炎樹は柔らかい唇の感触にどうしていいか分からずに硬直する。

「さっきの続き…………。ドキドキしたか？」

炎樹は答えられない。真っ赤になってアワアワと意味不明の言葉しか出てこない。ドキドキなんて可愛いもんじゃない。心臓が止まるかと思った。

「俺はドキドキしたよ」

そう言つて炎樹の手を取りそつと紫音は自分の心臓の上に置く。確かにそこは早鐘を打ち、炎樹と変わらない熱を持って手のひらに感触を伝える。

「炎樹、ドキドキした？」

囁く声はどこか甘い。炎樹はただ頷く事しか出来なくて…………。

「昔言つたよな。好きな奴ができたら一番に教えるって。炎樹俺お前が好きだ」

ドクンと一際大きく炎樹の心臓が鳴った。きゅっきゅと胸が痛い。紫音は今何と言つたろうか？

私の事好きって…………？

「炎樹は俺が彼氏じゃ嫌か？」

「わ、わかんない」

「でも俺の事好きだろ？」

そうなのだろうか？だからこんなにドキドキして苦しいのか。そういえば音羽の時には全くドキドキしなかった。

「多分……………」

「相変わらず鈍い奴。お前が嫌じゃないなら俺はお前と付き合いたい。そうすれば余計な虫も減るだろうしな……………炎樹俺じゃ不足か？」

「……………不足じゃ……………ないけど」

「けど、なんだ？」

「……………言つの初めてだからどうしていいのかわかんない」

半泣きでそう言えば目尻を軽く啄ばまれる。

「じゃあ他の男にもキスさせる？」

ぶんぶんとう首を振るとかえって来たのは嬉しそうな笑みで。

「じゃあ、取りあえず保留にしておいてやるよ。お前、いきなり結論出せとか苦手だもんな」

そう言って、紫音は炎樹を抱きしめた。

炎樹16才〜変化〜（後書き）

初恋は実ったようですが……紫音前途多難。頑張れ。

## 炎樹17才〜深化〜

紫音と、恋人同士のような関係になって一年が過ぎた。炎樹は未だに答えを告げきれないでいる。半年もたった頃にはいい加減、紫音を好きなのだという自覚は出来たが、今度は恥ずかしくて好きと言えなかったからだ。紫音とは相変わらず一緒に登下校して、時々初めて出会った場所でキスをする。後は休日デートする位か。周囲はもう二人が付き合ってるものだと思っていて、むしろ村公認の中なのだが、当人同士だけがまだ煮え切れない関係のままだった。申し訳ないとは思いつつも踏み出せない炎樹がここにいた。もうすぐ4才になる炎樹の弟の奏樹そいつは紫音を本当のお兄ちゃんだと思っていて、良く炎樹と紫音の後を着いてこようとする。

「にーたん！ねーたん！！まってよう！！そうじゅも行きたい！！！！」

まだ遠くまで歩けない奏樹がそう言えば、優しい紫音が肩車をしてやって……………。

「お前、重くなったなあ」

フワフワの深緑の髪を撫でてやりながら紫音が言えば、肩の上でくすぐったそうに奏樹が身をすくめる。

「ここ数カ月で身長も伸びたし、体重も増えたからね。私と母さんだと長時間のダッコはもうキツイくらい」

「そうじゅはおっきくなったら、ねーたんをおヨメさんにするのよ？」

「なんか、強力なライバルが登場したな……………」

げんなりした感じで紫音が言えば炎樹は慌てて奏樹に言った。

「あんだこの前は母様をお嫁さんにするって言ってなかった？」

「かあさまはどうさまのおヨメさんだからだめなんだって。とうさま言ったのよ？」

「父様……………」

子供に対して何を言っているのか……………。その様子が目に浮かんで炎樹は思わずため息を吐いた。

「じゃあ、炎樹も駄目だぞ？今の所、俺が予約済みだから」

しれっと言った紫音の言葉に炎樹の顔が赤くなる。

「じゃあ、そうじゅのおヨメさんは？」

うりゅりゅと鈍色の瞳から涙が零れそうになる奏樹を二人で慌ててあやししながら紫音が言った。

「そのうち現れるさ。母さんや姉貴とも違う『好き』って思える娘がな？その時、その娘に好きになって貰えるよう泣き虫は卒業して強い男にならないとな」

「ぐすん。そうじゅは、つよい子になる」

「エライぞ奏樹」

頑張って泣きやんだ奏樹の頬にキスしてあげながら炎樹が言う。3  
人で額を寄せあつて笑った。

「そうしてると親子みたいだねえ！」

その声をかけて来たのは近所の詩愛<sup>しめ</sup>さんで炎樹は耳まで赤くなった。

「だろ？俺もそう思う」

対して紫音は慣れたものだ。からかいがちな大人の言葉もさらりと流す。紫音の頭に抱きついた奏樹はただキョトンとしているだけだ。

「若い子はいいねえ。これからも仲良くしな！！」

そう言うと詩愛さんは畑に向かって行ってしまった。

「俺等も来年は18だもんな……………」

「うん……………」

18は森歌の民にとって成人の年である。その年になって初めて求婚出来るようになるのだ。冬になれば冬花祭<sup>とつかまつり</sup>という男性が女性に歌を贈り、女性が男性を気に入れば歌を返すという恋の鞘当が繰り広げられる。無事、恋人同士になった暁には男性が自らつくった耳飾りを女性に捧げて片方が男性に返されると婚約成立となる。既婚者と、婚約者がいる者は片方の耳に耳飾りをしているのが特徴だ。冬花祭を待たずしてカップルになる者もいるが、冬花祭で婚約する確率の方が断然多かった。

「なんか、アツという間だよね……………」

「そうだな……………」

肩の上で船をこぎ出した奏樹を背負いなおし、紫音は森へと歩みを進める。それについて行きながら炎樹は紫音の広い背中を見た。一年前より大きくなったその背中を。着いたのは二人の思い出の場所。初めて出会った木の下で。

「俺、そろそろ炎樹の答えが聞きたい」

そう先程までとは違う、真剣な顔をしたのは紫苑で。

「う……………」

炎樹は長い間待たせてしまったと思うから答えたいのだけれど、やっぱり気恥かしくて中々言葉に出しづらい。

「炎樹は俺の事好きか？」

そう、紫苑が聞いた時だった。

「ねーあなたはーたんの事好きなのよ？まえにそうじゅに言ったもの。とうさまや、かあさまや、そうじゅいがいでイチバン好きっていきなりピョコンと起きた奏樹に先を越されて炎樹は微かに悲鳴を上げた。

「奏樹！……！」

いきなりなんてこと言うの！！！！と声をあげる。

「お前、起きてたのか……………？ふーん、いい事聞いたな。炎樹。奏樹には言えて俺には言えない??」

紫音に少し意地悪そうな顔をされて炎樹の顔が真っ赤になる。

「……………うん……………うんと……………ね？私も……………紫苑の事好き……………よ??」

俯いてそう言うのが精一杯で、そんな炎樹を優しい目で紫苑が見つめる。

「そうじゅもー！！にーたん好き！！！」

「奏樹、ありがとな。お前のおかげ」

そう言つて紫苑は奏樹の頭をグリグリ撫でる。面白かったのか奏樹がきやははは、と笑い声をあげた。

「炎樹」

来い来いと呼ばれて近くに行けば、満面の笑みの紫苑の顔があつて。

「俺今すげー嬉しい」

その言葉にバクバクと心臓が鳴る。そつと紫苑の手が炎樹の頬に触れる。

「お前って、本当ごういこの苦手な？真っ赤つか」

「う……………ん……………」

「でも、そんなところも好きだ」

そう言われれば嬉しくて。でも、余計顔が赤くなるのがわかる。

「にーたん、ねーたんちゅーするの？」

じーっと見ていた奏樹がまたとんでもない事を言った。

「奏樹？！どこでそんなコト覚えてきたの？！」

バクバクした心臓が止まりかけ、炎樹は奏樹に詰め寄った。

「んー、しーちゃんが好きあってるふたりはちゅーするのって言うてた」

しーちゃんと言うのは近所の奏樹と同じ年の女の子だ。

「ばーか、奏樹の前でするわけないだろ？」

「じゃあ、そうじゅがいなかったらちゅーするの？」

そう返って来るとは思わなかったのか、ガシガシと頭を掻く紫苑。

「……………あーそう来るか……………そういうのは普通は人に言わないもんなんだ。だから奏樹も人に聞いたりしちゃだめだぞ？」

大きくなったらわかると思うけどな、と言って紫苑が奏樹のオデコをつつく。

「そうなの……………つまんないの」

兎に角、納得してくれたようで助かった。最近の奏樹は気になる事があるとなんと答えてくれるまで聞くのをやめない。それも大層しつこかった。一難去ったことにホッと溜息が出る。

「炎樹、俺もお前が好きだ」

真剣な顔で改めて言われると何だか照れる。炎樹はコクリと頷いた。

「そうじゅもー!!」

满面笑顔の奏樹が紫音の上から炎樹に抱きつく。そして頬にキスをした。炎樹も笑いながらキスを返してやる。

「さて、奏樹、今日は何の歌がいい？」

「かえるさんのうた！」

雨が来ない時の子供版の雨乞いの歌だ。

その後は3人で合唱になった。優しい雨がシトシトと森に染みわたる。今日も森は歌を包みこんで響かすのだった。想いは日々深化していく。

炎樹17才〜深化〜（後書き）

これで晴れて恋人同士。ちっちゃい奏樹の一押しでなんとかになりました。

紫音良かったね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7148u/>

---

森歌の民～小鳥の話～

2011年7月19日13時10分発行